

現代文明と宗教

本多弘之

bonda hiroyuki

大悲

昨年九月のニューヨークで起こったテロ事件は、日常の交通手段となっている大型旅客機を、巨大ビルに突入させ崩壊させたということ、非常に大きな衝撃を世界に与えた。犠牲者の数もさることながら、現代文明の日常性に、使い方次第で危険極まりない兵器化するものが、無防備に使用されていることを顕わにしたのである。

しかし、あの事件の後味の悪さは、やはり実行犯の動機の不可解さによるところがあると思う。いろいろと解説がなされはしたが、テロの実行にかかわる人間の決断に、宗教的な信仰の裏付けがあるらしいところ、現代文明の利器と人間の精神の不可解さとの間の大きなギャップを感じるのである。

西欧の文化史の上では、信仰と理性とは相

反するものとされ、理知によっては決して信仰に入ることとはできないと教えられてきた。だから「不可解なるがゆえに信ずる」とさえいわれるのである。だから逆に信仰の生活と、理性の営みとは、領域を異にしている。同一人物において理性に立った科学的研究と教会の信仰とが同時に成り立ちえたのである。西欧の科学者はほとんど皆、キリスト者

なのである。

それはそうなのではあるが、科学文明が圧倒的な勢いで近代生活を覆つてくると、合理的・効率的な作業や、比較的安易な生き方が可能になり、人間生活の困難さが減少してくる。いままで信仰の領域としてあきらめていたようなことが、科学技術によって可能となつてさえる。自然現象や自然条件に圧倒的に左右されていた生活から、自由に人間の好む条件や空間を生み出せるようになってきたのである。これまでは人間の理性的限界の彼方と思われていたことが、科学的探究や工業技術の進展によって、人間の手中に収められ、あるいは人間理性の展望の中に把握されるようになった。それによって相対的に信仰の領域が圧迫され、また縮小せざるを得なくなつてきている。それによって、近代的生活に占める神話的領域はいやが上にも減少してくる。のみならず、信仰生活は現代社会の表面から引退し、合理的な解釈可能の部分でやつと息をつくような形になつてきているのではなからうか。

いわゆる近代文明の便利さ、それは気候の変化や自然環境の不都合さなども、人間のエネルギー利用によつて、人間生活に便利ないように改変しているし、乗り物のスピードや情報機器の発達で時間を短縮し距離を縮小してきた。そういう科学技術によつてもたらさ

れた恩恵の反面に、公害を始めとする諸問題が紛起している。それはそれで解決していかなければならない近い将来の抜き差しならぬ課題ではある。けれども科学文明はまだまだ先へ先へと人間理性の領域を拡大していくに相違ない。

生活情況が近代文明の生活内容へと怒濤のように変えられていく日本の情況にとつて、今回のニューヨークのテロ事件の意味はいつたい何なのか。ある意味で、アメリカ合衆国大統領が押さえたように、「文明に対する野蛮からの戦争」というような一面が確かにある。文明の生活からとり残されている地域、すなわち定住して科学技術のもたらす文明空間を生きるいわゆる先進国に対して、砂漠地帯を移動しつつ牧畜をなりわいとするアラブの文化圏は、近代化という点では間違いなく遅れているであらう。そのことによつて、現代の繁栄の指標でもある経済活動の規模や、そこに生活する庶民の物質的な豊かさも、圧倒的に乏しいことになる。

しかしなぜそのことが、あのような形の、近代の科学技術の粋を集めた旅客機で、世界最大の貿易センタービルに突入するというテロになつたのであろうか。心理的背景には、世界最大の資本主義国アメリカの豊かさに対するひがみやねたみ、あるいは傲慢な西欧・米国のアラブに対する経済的な対策への怒り

の蓄積などもあつたかもしれない。それにしても、無辜の一般市民を巻き込み、自分たちの死をかけてそれを実行する人間の内面の不可解が残る。先の大戦の折の日本の軍人の態度、なかでも「神風特別攻撃隊」に象徴される自己犠牲の精神、これは西欧の人々にとつて恐怖であり、不可解であつたという。

この不可解さの根本が、理不尽な存在に対して自己の生命を懸けて抗議するということにあるのなら、このことを武力や物質的補助で解決することはできないのであろう。まして実行者の信念に、今生の神への奉仕によつて次の生より良きあり方が与えられるという教えがあるのなら、なおさらのことである。

この事件に象徴されていることは、近代文明を支える科学技術そのものもつている内在的な恐ろしさと、それに反作用しようとする原理主義的な宗教の超越的な抵抗精神のあがきとが、今後の世界の解決困難な展望を示している、ということではなからうか。

我々は、豊かさを徹る誤りの自覚と同時に、貧しさに虐げられる苦難への同心も、よく噛み締め直さなければならぬのではなからうか。仏教が四無量心（慈悲喜捨）をもつて教え、十方衆生に大悲を呼びかけたもう精神を自他共に確認したいものである。

（ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長）